4．健康・安全の窓口から見た幼児らの生活

座主　真知子

事例１－①　「消毒してキズバン貼ればいい！」　９月４日（火）

４歳児Ａ児「先生、これ（左肘のキズバンを指さしている）」

よく見ると汚れたキズバンからは、わずかながら悪臭があり、傷は化膿していた。本人には傷が悪化していること、それは貼りっぱなしにしてあったキズバンが原因であることを伝える。

４歳児Ａ児「お母さんが貼ったの。きのうの前の前の前の・・・いつだったっけ？」
「お母さんとりなさいっていわんかった・・・」
「これどうしよう」「ばい菌退治できるかな？」
養護教諭　「どうしようか」
４歳児Ａ児「新しいキズバンすればいい！」
養護教諭　「そーっか。それで治るかな？また、こんなふうにならないかな～」
４歳児Ａ児「うーん・・・」（腕組みをして考え込む）
「消毒してキズバン貼ればいい！」
養護教諭　「ふーん」

丁寧に水洗いをし、消毒をするなどの処置をしながら、４歳児のＡ児にできるだけわかりやすい言葉を選びながら、水洗い、消毒などの処置の大切さやキズバンの害・効用を説明する。最近キズバンに興味を持っているＡ児は真剣に聞き入っていた。
養護教諭　「これでばい菌は退治できたよ。キズバンはどうする？」
４歳児Ａ児「しなくていい！このままでいいんだよ」とはっきり答え去っていく。

数日後、Ａ児はテラスで転んで膝にすり傷を負い、自分で水洗いをしようと廊下をうろうろしている。けがをしているＡ児に気がついた４歳児Ｂ児は保健室で薬を付けてもらうようすすめる。しかし、Ａ児はまず水洗いをしなければならないことを主張し、それをなかなか理解しないＢ児に一生懸命説明する姿が見られた。そして、水洗いを済ませ、Ｂ児とともに保健室にやってくる。丁寧に処置の必要性を説明しながら処置をする。最後にＡ児にキズバンの有無をたずねると「いらないよ」と答える。この間、養護教諭とＡ児のやりとりをＢ児は黙って聞いていた。

事例１－②　「キズバンどうする？」→「う～ん」　９月11日（火）

養護教諭　「キズバンどうする？」
４歳児Ｃ児「うーん？」（しかめっ面）
養護教諭　「血も出てないけど。どうする」
４歳児Ｃ児「うーん？」
養護教諭　「キズバンずっと貼っておくとばい菌の巣になるんだよ。どうする」
４歳児Ｃ児「うーん？」
養護教諭　「もうしばらく考えてみる？」

4歳児C児「うん（にっこり）。考えてから来るわ」

（廊下に出る）
数人のお母さんが囲んで「C児ちゃんどうしたの？」と詰め寄る。C児は困ったような顔で黙ってお母さんたちを見上げている。

お母さん1「C児ちゃん、痛かったら、先生にキズバン貼ってもらったら」
4歳児C児「うーん」
お母さん2「キズバン貼っててていっといで」
4歳児C児「うーん」
お母さん3「キズバン貼ってもらったら治るよ」
4歳児C児「もー。今、考えているの！！（膨れっ面）」

保育室に戻り、しばらく遊んでいたが30分程たって再度来室する
4歳児C児「先生、痛いからやっぱり貼ることにした」
養護教諭　「そう。気になって遊べないんだ。じゃあ貼ってあげるね。でも、ばい菌の巣にならないようにすぐはずすんだよ。いつはずす？」
4歳児C児「うーん。うちへ帰ったら」
養護教諭　「水に濡れたらばい菌の巣になりやすいから、家に帰る前でも濡れたらはずすんだよ」
4歳児C児「うん。幼稚園で濡れたらはずす。濡れなかったら家に帰ったらはずすんだね。わかったよ～。」と言い退室する。

＜考　察＞

○けがの処置について

幼児がけがをした場合、傷をキズバンやガーゼなどで覆い、見えなくするだけで治った気になったり、安心したりすることがある。逆に覆わないでいるといつまでも気にかかり活動に取り組めなかったりということもある。これまで、些細な傷にキズバン、ガーゼ、包帯などを求めてくる幼児がいた。そこには心のメッセージが発せられていることがあり、心のケアを優先し、求めに応じ大袈裟な処置をしてきたこともある。傷に対する不適切な処置がかえって傷を悪化させてしまうことがある。A児のけがもまさにそういった状況であった。A児自身、けがにはキズバンを貼るのがあたりまえのようになっていた。しかし、今回、処置についてきちんと説明しながら、適切な処置をすることで、A児にとっては処置の方法を学ぶ機会となったのではないだろうか。ここでは、4歳児のA児には難しいかなと悩みながら説明をしていたが、数日後のA児の新たなけがへの対応から、この時の説明をA児なりに理解し、受け止めていたことがわかる。この事例から、処置についてきちんと説明し、適切な処置の経験（受けたり、見たり、聞いたりなど）を積み重ねさせることの大切さを感じた。また、A児やC児ばかりでなく、多くの幼児がキズバンを好んで貼っているという実態から、日常的にキズバンの正しい利用方法を伝えながら、無闇にキズバンや薬に頼らない態度を養っていければと考えている。

○家庭との連携について

A児の事例から安易にキズバンを使う母親の姿が伺える。また、C児の事例でも朝からスッキリしない表情のC児にすぐにキズバンに頼ろうとしている母親たちがいる。日常的にも幼児のからだのあちこちにキズバンを目にする。時には数日間貼りっぱなしで臭くなっているキズバンもある。このようなことから、家庭においてもキズバンが安易に利用されていて、その割には適切に利用されていないことが多い。従って、幼稚園のみならず家庭においてもキズバン等の衛生材料を含めた薬が正しく利用されるよう、また薬に頼り過ぎない姿勢を養っていけるよう保護者にも伝えていかなければならないと思った。その一方、昨年度の事例の検証から、キズバンを母親の愛情の証としている幼児や愛情を求め貼り続けている幼児がいることもわかっている。従って、一人一人の個の状況に応じた処置ができるよう家庭との連携を大切にしたい。

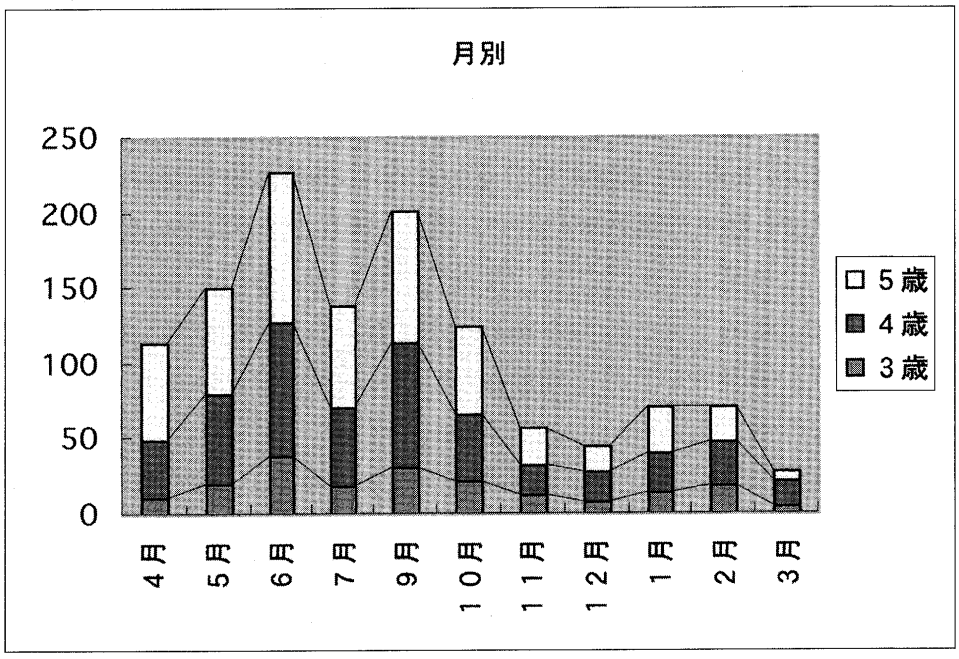
また、安易に薬を使う習慣になっている保護者の中には、幼稚園での処置（水洗い、消毒、冷やすなど処置の形跡の残らないような処置）に対し、「幼稚園でしたけがなのに何もしてくれなかった」などと訴える保護者もいる。そういった保護者に誤解を招かないよう保護者にもけがの処置について、その都度丁寧に説明していくことが大切であると感じている。

＜指導計画の見直しに向けて＞

・日常的にはけがの場面を捉え指導していくが、幼稚園で処置を受ける経験のない幼児などにも集団指導などを通し、適切な処置のあり方を伝えていく場を設定する。特に、けがをする幼児が多く、運動会の練習が始まり、キズバンを使う機会も増えるこの時期を捉え、集団指導の場を設ける。

・適切な処置のあり方については、幼児のみならず保護者にも指導をしたり、理解を求めたりすることが必要である。また、薬に頼らない態度を養うためには保護者との日々の協力体制が必要である。心のケアを含めた個に応じた処置を心がけるためにも家庭との連携を深めなければならない。

[2001年　保健室利用状況]



事例２－①　「もうすぐ小学生なのに・・・」　12月10日（月）

12月の体重測定では５歳児は自主的に保健室に来て計測するという方法で実施した。登園して身支度が済むとそれぞれが保健室に来て体重測定を済ませる。D児は元々スローペースの幼児で、体重測定にもほとんどの幼児が終わったころにやってきた。保健室では残り数人の幼児がいる中で、D児は体重測定を済ませ、何するとはなしにうろうろしている。そこに、体重測定を終え、保育室で待っていたG児がD児を遊びに誘いに来る。いつも一緒に行動しているD児だが、「ここで絵本を読んでいく」とG児の誘いを断る。G児は一人帰っていく。しばらくして、保健室内はD児だけになる。D児は本棚の絵本を選んでいるふりをしながら、こちらに背を向けたまま小声で話しかけてきた。

５歳児D児「先生、今日私おねしょしちゃった・・・」
養護教諭　「そーお」
５歳児D児「もうすぐ小学生なのに・・・」
養護教諭　「小学生でもおねしょすることくらいあるよ」
５歳児D児「うそ～」
少々微笑みながら、こちらを見る。しばらく間を置き
５歳児D児「そっか」と納得したように言い、本棚を整理し退室していく。

この日の保健室での様子を母親に伝えた。母親からは「最近日中でもよくパンツにおもらしをする」「動作の遅いD児に小学校入学にむけ不安や焦りを感じている」などが話された。特に「最近何か言う事に枕詞のようにもうすぐ小学生なのにと言っている」と自分の言動を振り返る場面もみられた。

事例２－②　「最近毎日のようにおねしょするんです・・・」　12月18日（火）

５歳児E児の母親は玄関からE児が保育室に入っていくのを見届けると、玄関で朝の健康観察をしている養護教諭に小声で「先生、ちょっと相談があるんです・・・」と近づいてくる。母親からは雑談も交えながら以下の内容が語られた。

・「今まで夜のオムツがとれてから失敗することのなかった子なのに、最近毎日のようにおねしょをするんです。もう２週間ほど続いているんです。しない日がないくらい」
・「寒くなったせいかと考え、布団や室温を考えたり、水分量を制限したりいろいろ工夫してみたましたが、効果はありませんでした。寒さのせいではないように思うんです」
・「精神的なものとも考えたのですが、最近特に変わったこともなく、以前のように幼稚園をいやがることもなく、どちらかというと喜んでいっているし、以前よりお友達ともかかわっているみたいだし、幼稚園の生活にも問題がないように思うのですが・・・」
・「ただ、お友達と遊べるようになったからか今までになく、人目を気にするようになっている。『みんなこんなもの着てこない』とか『みんなそんな物を持ってない』とか」
・「『大きくなった？』、『大きくなったから・・・ができるようになった』など成長を意識した発言が多くなってきている」

・「本人はおねしょについてはそれほど意識しておらず、恥ずかしいとも思っていないよう。もうすぐ小学生なのにおねしょしていても大丈夫でしょうか？どうしたら止まるでしょうか？」
・「私自身『そんなことしていては小学校には行けない』とか『そんなこともできなかったら小学校にはいけない』などの発言は多くなっている」

＜考　察＞

○夜尿、遺尿の捉え

毎年この時期、年長児特に男児の夜尿、遺尿、頻尿などの相談が増えてくる。ほとんどの場合入学して間もなくあるいは夏頃までには解消されているようだ。

この時期、園や家庭においても入学の準備が徐々に進み、時にはプレッシャーをかけられたり、無理に背伸びをしたりしなければならないことも出てくる。5歳児は不安と期待を抱きながら小学校生活に思いを馳せている。その中で個によっては不安がつのり、身体症状として現れてくることもあるようだ。幼児が何かを乗り越えようとするとき退行現象として現れることがある。また、精神的に未成熟な幼児にとって、精神的負担が身体症状として現れることも珍しくない。しかし、ちょっとしたプレッシャーやちょっとした背伸びは逆に成長をもたらす。成長の証と考えるならば、単に問題解決に走るのではなく、成長しようとしている姿を認め、支えるという援助が出きるのではないか。D児やE児の場合も問題行動と捉えるのではなく、心が成長しようとしている証と捉えることも大切ではないだろうか。

しかし、個々の対応を考えるとき、心のサインが母親からのプレッシャーによるものか、小学生という未来への不安からなのか見極めて対応していくことが必要であると思う。

○母親への対応

この時期、幼児だけでなく母親も小学校入学にむけて、不安や焦りをつのらせる。それが時には子どもに必要以上のプレッシャーをかけてしまうことになることもあるようだ。また、母親の不安や焦りがそのまま子どもの精神状態に反映されることもよくある。

D児やE児の母親も子どもの心のサインを読みとることなく、目の前の問題行動にとらわれ、ますます不安になったり、焦ったりしている様子がうかがえる。その母親の精神状態が子どもにも影響し悪循環を起こしているようにも思われる。しかし、ちょっと心を開いて話すことで、自分の子どもに対する言動を振り返る機会が持てたことは母親にとってよかったのではないか。母親の不安を受け止め、子どもから発せられている心のサインを成長の証と前向きに捉えられるよう母親をも支えていくことが必要だと思う。

＜指導計画の見直しにむけて＞

・小学校入学にむけての不安が大きい幼児にはその心のサインを見逃さず、それを乗り越えられるよう個々の支えとなる援助を考える
・不安の大きい母親に対して精神的支えとなると同時に子どもの成長や成長過程を実感できるような援助をしていく

事例３　「先生は何で裸足にならんが？」　５月14日（火）

５歳児Ｆ児は数名の幼児と遊戯室からテラスにマルチパネを運びだして遊んでいる。Ｆ児はテラスから運動場の幼児の様子をビデオで撮影しているＨ先生（教育学部内地留学中の公立小学校教諭）に気づき、そろりそろりと近寄る。

５歳児Ｆ児「先生は何で裸足にならんが？」

Ｈ先生　「・・・」

「じゃあ、Ｆ児くんはなんで裸足になっているの？」

５歳児Ｆ児「元気になるためだよ。裸足になっていると足がつよ～くなって、もっともっと元気になるんだよ。先生は元気になりたくないの？」

Ｈ先生　「う～ん。元気にはなりたいよ」

「でも、他にも裸足になっていない子いるじゃない。どうして？」

５歳児Ｆ児「それはね、風邪とかひいていて（裸足には）なれないんだよ。他にけがをしている子もいるし・・・」

Ｈ先生　「そうっか。じゃあしんちゃんは風邪もひいてないし、もっともっと元気になるために裸足になっているんだ」

５歳児Ｆ児「そうだよ。ほら（足裏を見せ)、強い足になっているでしょ。先生もなったら」

Ｈ先生　「う～ん。先生はちょっと風邪気味だし、足を洗う準備もしてきてないし、今日はやめておくわ～」

５歳児Ｆ児「そっか。じゃあ早く元気になるといいね。今度来たときは裸足になってね。裸足になっていっぱい、いっぱい足鍛えれるといいね」と言って、マルチパネのところに戻っていく。

［これまでの５歳児Ｆ児の様子］

５歳児Ｆ児は年少、年中の時、裸足についてクラスで集団指導をしても個人的に誘いかけても興味を示さず、ほとんど裸足になることはなかった。活発に戸外で遊ぶことも好まず、また自らはたらきかけて人とかかわることもあまりない幼児だった。年少、年中とも土踏まずは形成されていない。

年長になり、裸足になり自ら戸外に出向いていく姿がみられるようになった。

＜考　察＞

これまで、幼児期に土踏まずの形成を促す大切さを感じていることから、幼児には土踏まずの形成の意義を訴えたり、そのための一手段として裸足があることや戸外での遊びの大切さなどを伝えてきた。実践するかしないかは本人にゆだねてきた。それは自分にとって必要な健康情報を取り入れ、自ら実践しようとする力を養うことが大切だと考えたからである。集団指導の中で情報を提供したり、実際場面で声をかけたりしながら、裸足になり戸外で遊ぶように促してきた。

Ｆ児は年少、年中と裸足になることをためらっていた。個別に声をかけたり誘ったりしても、なかなか裸足に興味を示さず、戸外に積極的に出て遊ぶこともなかった。しかし、年長になり、気がつくといつの間にか裸足になっていた。その要因として、①担任の影響（担任は自然に裸足になり運動場で遊んでいる）②クラスの雰囲気（ほとんどの幼児が裸足になっている）③それまでの継続的な働きかけ④Ｆ児個人の成長などが考えられるのではないか。

この事例で、Ｆ児がＨ先生に裸足になっていないことへの疑問をなげかけたり、裸足の意義を自分なりの言葉で訴えたり、相手の健康状態を気遣った上で自分だけでなく、ともに健康になろうと働きかけたりしている姿には驚かされた。これまで積極的に他者にかかわることのあまりなかったＦ児が、自ら声をかけたことから、自分のしている行為に自信を持っている様子が感じられる。また、その言動からも「しなさい」と言われて受動的にしているのではなく、自らの意志で能動的に実践しているという姿もうかがえる。また、Ｆ児は先生が裸足にならないと言った時も、それに対して批判することなく、すんなりその言葉を受け止めている。Ｆ児自らの意志で実行している証でもあるのではないか。

土踏まずの形成を幼児期に促すことは大切なことである。そのため、裸足になって戸外で元気に遊ぶことを奨励してきた。しかし、土踏まずができている、裸足になっている、戸外で元気に遊んでいるという姿に安心してしまうのではなく、自ら考え実践しているかどうかというところにも目を向けていかなければならないと思った。私たちはこれは健康によいことだから「しなければならない」「してあたりまえ」とついつい思いがちである。しかし、この事例から幼児期の健康教育において結果ではなく、その個の育ちを大切にしながら、その過程を大切にしていく必要性を痛感させられた。そのためにも単発的な指導にとどまらず、３年間を見通した継続的な指導が必要ではないかと思う。

＜指導計画の見直しにむけて＞

・裸足については個の育ちを大切にし、集団指導、個別指導を取り混ぜながら継続的に指導していく
・土踏まず形成の結果のみにとらわれず、それまでの過程を大切にする援助を考えていく